

ギバメ！キコハチ群談
～炭焼きのけむりがつなぐふれあい活動～

奥出雲町立三成中央公民館

1、はじめに

旧仁多町の中心市街地にある当公民館は、町民体育館、農村環境改善センターが併設しており、三つの施設の利用客年間延べ約5万人の窓口対応を日常の業務としている。

この管理運營業務は公民館業務の大半を占めており、3名の職員は公民館独自の活動との狭間で日々葛藤を繰り返しているのが現状である。

その現状はともかく、地域の中心としての本来の公民館のあり方を再認識すべくこの事業に取り組んだ。事業の実証に当たり、地域力醸成の言葉が持つ意味を理解することから始まり、この活動が果たして地域力醸成といえるのか、など試行錯誤の繰り返しであった。

しかし、多くの町民や関係機関の皆様へ支援協力をいただき、この一年間のプログラムを実行できたことは、地域の皆様の公民館活動に対する期待の大きさとも言え、身のひきしまる思いがしている。

2、地域力醸成事業の概要

- (1) 実証事業名 「ギバメ！キコハチ群談」
- (2) 実証事業のテーマ 「炭焼きのけむりがつなぐふれあい活動」
- (3) 実証事業のねらい

少子高齢化により静かになった当館区を、荒廃した里山を憂い、我々を育ててくれたふるさとに恩返ししたい、マメでにぎやかな町にしたい、という現役を退いた頑固者のグループ「キコハチ群談（やま子会）」の炭焼き活動を原点とし、地域、世代を超えての交流の場を増やし、地域のネットワークを拡げ、絆をより強めることをねらいとする。

3、具体的な取組

(1) 地域力醸成推進委員会

地域で活動しているグループや個人また、老人会、学校幼稚園、及び地域団体等に呼びかけを行い委員会を設立した。

委員長は「やま子会」の会長とし、現状の共通認識と実証事業のねらいについて、その目的を明確にし、課題を整理しながら協力して活動を進める体制ができ、今年度は七つのふれあい活動を実践することとした。

(2) 具体的な取組事例

炭焼きのけむりがつなぐふれあい活動事例報告

① 笹巻体験交流会（6月）

幼稚園児と老人会の交流をねらいとし、笹巻き文化をとおして実証。

園児・保護者会・老人会・近所のおばあさん達 40 人余りの楽しい交流ができた。

まず老人会の皆様を先生として団子を作ることから始まり、小さな手でバライティーあふれるいろいろな大きさの団子ができた。

お年寄りがつくる笹巻きの手際よさに園児たちはびっくり。手伝ってもらいながら何とか笹を巻くことができた。



② 水辺の生物観察会（7月）：斐伊川の親水護岸を利用して、自然観察員の指導の下に園児・児童・保護者会・学院生・広域交番の若いおまわりさんたちで生物観察会を行った。

うなぎやボッカ、さわがにが採れておおさわぎ。しばらく観察してやさしく川に帰した。

引きつづき、やま子会や会場近くの一人暮らしの高齢者を招待し、鮎つかみやスイカ割りを行い、世代間の交流を深めた。

やま子会の炭で焼いた鮎の串焼きは、それはそれはおいしく、60名余りの胃袋にしっかりと収まった。



③ 地域間交流納涼大会（8月）

やま子会所有の炭焼き小屋の所在地である美女原集落（世帯数 15 戸）との地域間交流をねらいに、炭焼き小屋の広場を会場に限界集落化しつつある当集落の住民と、他地域のそれぞれの世代が納涼大会を通して交流を深めた。

やま子会会長の炭焼き文化の歴史探訪や苦労話から始まり、公民館図書室司書による炭焼きにまつわる本の読み聞かせや、マジックショーまた、美女原自治会「若いもん会」によるバンド演奏など、約 200 名の参加者がやま子会婦人部による仁多米の炊き出しを食べながらの楽しいひと時をすごした。暗くなつてのホタルの乱舞には、子供たちが歓声をあげ、久しぶりの子供の声に集落のお年よりは感激されていた。



④ 炭焼き体験交流学習会（9月）

高尾小学校 3.4 年生と三成小学校 4 年生（29 名）を対象にして、やま子会を先生に社会勉強の一環として炭焼きの体験学習を行った。炭焼きの大変な労働をそれぞれの児童が同時に体験し、炭焼きの歴史文化について意見発表することがねらいであり、炭だらけのかわいい顔が印象的であった。

また、「美女原集会所」での昼食会では、やま子会のおじさんから里山を守る活動などについて話を聞き、また突然のスズメ蜂と大スズメ蜂の戦いも観察することができ、蜂に刺されたおじさんが病院へ運ばれるなどのハプニングのなか、手づくり弁当をおいしくいただいた。



⑤ 三成地区文化祭への参加（10月）

毎年開催されている文化祭の参加について、本年は地域力醸成推進委員会としてブースを確保し、委員会メンバーによる、炭・新鮮野菜や山菜おこわの販売、また今までの活動写真を展示するなど多くの地域の皆様に活動報告ができた。

また、地域力醸成という熟語を広く町民の皆様に紹介することができ、大変有意義な文化祭になった。

⑥ いも煮会（11月）

やま子会や近所のおばさんたちが遊休農地を耕し育ててくれた里芋を子供たちが収穫し、全員参加で準備した野菜を使い、4個の五右衛門がまでのトン汁づくりは、自然の恵みに感謝するよい機会になり、その味は格別であった。

子供たちを喜ばせようと考えたアンパンマンの仕掛けは、予想通り失敗に終わったが、子供たちからの暖かい拍手に慰められた。

三成小学校全校児童・幼稚園児・保育園年長組・老人会・やま子会及び地域の皆様総勢約300名ものふれあい活動になり、想定外の集いに感激したところである。



⑦ ソバ打ち体験交流会（12月）

in 高尾小学校：全校児童14名と雲南警察署青少年補導委員及び広域交番の若いおまわりさんとのソバ打ち体験交流会を開催した。

補導委員さんは当小学校の卒業生であり、地域ではソバ打ち名人として有名である。

発見したことはソバ打ちは児童がはるかに上手であったこと、転勤族の若いおまわりさんは四苦八苦、でも食べるのは上手かった。



in 三成幼稚園：園児10名とその保護者、やま子会、老人会、など約40名の楽しいソバ打ちとなり、顔中粉だらけになりながらも真剣にソバ打ち名人の手元を見ている園児の姿が印象的であった。



また、ソバがゆであがるまでの時間は老人会と園児とのふれあいタイム。

公民館の自主事業としての昔の遊び（ブチこま・おはじき・折り紙・お手玉など）を体験した。

園児の目の輝き、お年寄りの弾んだ声が園内に響きわたった。

そのあとのソバの味は言うまでもない。

4、事業の成果と課題

地域力醸成プログラム事業のこの数ヶ月の成果としては、各団体個人の個々の活動を公民館が仲介することにより、お互いの目的や悩みを何でも話し合い、時には論じ、時には子供を巻き込み、大笑いしながらのふれあいの場を提供できたと感じている。しかし、実態としての成果を確認することは中途の段階であり、これからの取り組み方如何によると思う。

課題としては、参加者が固定化する傾向にあり、より多くの町民が参加できる仕掛けをつくること、また児童園児たちがお客様にならないよう、一緒に汗をかくような企画が大事ではないかと感じた。

5、おわりに

この一年の反省を踏まえながら、住民自らが参加しやすい事業の展開と、その環境づくりを考えること、特に、子供たちの元気な声で、町全体がマメでにぎやかになるよう、未知数の町民ネットワークが活用できる体制づくりが必要と感じた。

初期においては、準備に追われる日々であり、事業の達成感もなく、ふれあい活動とは何ぞやと自問自答の繰り返しであったが、お年寄りや子供たちの笑い顔を見るにつけ、心も和み、より強い絆が生まれたのではないかと感じた。

また、この活動は、ふるまい向上・親学・先生学・人間学の必要性を、強く認識する場にもなった。

※ 主役で協力してくれた 三成幼稚園のおともだちを紹介します



元気をくれて あ・り・が・と・う !!!